

読み取る力と批判的に読む力、 二つの国語力を中高で共有する

東京都立西高校 大越喜文

新課程において国語、中でも現代文の授業は思考力、判断力、表現力の育成において重要な役割を果たすと考えられる。現代文での中高接続における課題はどのようなものなのか。

入試で必要な読み取る力と 批判的に読む力

中学校と高校で、現代文の授業は何が異なるのでしょうか。それぞれの授業の先にある「入試」から考えてみると、高校入試で出題された素材が、大学の入試問題でも出されることがあるように、「どんな文章を読むか」ということに中高で決定的な違いはありません。

では、何が違うのかと言えば、素材となる文章を「どう読むか」ということでしょう。高校入試でまず求

められるのは、文に書いてある内容を正確に読み取る力です。一方、大学入試では、読み取った内容に対して自分はどう思うかを問う出題、すなわち、批判的に読む力を問うものがより一層多くなります。

現代文には、今を生きる私たちの問題意識が表出されています。現代社会を無批判に受け入れるのではなく、かといって自分が生きる社会を拒絶するのでもない。逃れられないものに立ち向かいながら、今後どう生きるかを考える。つまり、「社会に対するまなざし」を持てるかどうか

が大学入試でも問われます。

まずは書いてある内容を読み取る力をしっかり身に付けさせる。そして、その力を土台に問題意識を持って批判的に読む力を身に付けさせる。この二つの力を、中学校と高校が連携しながら高めていくことが、現代文の授業では求められると思います。

授業形式や発問を工夫して 批判的に読む力を付ける

では、中学校の国語の授業では、批判的に読む力は問われないので

でしょうか。もちろんそんなことはありません。現代の作家が書いた文

おこし・よしふみ◎教職歴37年。同校に赴任して9年目。担当教科は国語。東京都立五日市高校、国立高校、南多摩高校を経て、現職。



章を読む以上、書き手が言いたいことを読み取るだけでなく、それについて読み手がどう思うかを、中学校教師はきつと問い掛けているはずで
す。教師の力量と生徒の感性次第では、高校の現代文よりも深い部分にまで足を踏み入れていることも多いでしょう。

一方、高校の現代文の授業で、内容の読み取りが不要なのかといえ
ば、それも違います。大学入試では、自分の思うまま読むのではなく、著
作者と出題者の意図をくみ取りなが
ら読まなければいけません。自分の
意見とは違ったとしても「この筆者
の意見はこれだ」と読み取る力が必
要になります。したがって、高校の
授業でも、正確に読み取る指導は必
要です。

正確な読み取りを土台にして、授
業の中で批判的に読む力を身に付け
ていくには、主題に対して生徒が意
見を述べ、それを教師が自分の意見
で批判し、更に、それを踏まえて生
徒が考えを深めていくプロセスが必
要です。教師が一方的に教え込むの
ではなく、生徒と教師双方が問題意
識を持った対話型の授業によって批

判的に読む力が身に付くのだと思
います。

入試学力と生きること 考える力はつながっている

また、文学的想像力と称して、読
み取りをあいまいにしているのは、難
関国立大の個別学力試験の問題は解
けません。例えば、一橋大では例
年、2000字以内の要約問題が出題
されています。この問題文を読み込
むと、2000字でこそ要約できる文
章が出題されていることが分か
ります。問題文が十分に吟味された上
での出題だから出来ることです。

このような力を生徒に身に付けさ
せるためには、高校でも日頃から、
教師は生徒の思考力を把握し、問題
文を吟味しなければなりません。こ
の文章とこの問い掛けならば、生徒
はどのような答えを書くのか。「……
とは何か」と問うべきか、それと
も「……とはどういうことか」と問
うべきか、それによって生徒の答え
は変わります。生徒に問い掛ける前
に、まず教師の指導者としての正確
な読み取りが必要です。

入試問題が解けるようになるとい

うことと、現代をどう生きるかを考
えることは、一見つながりがないよ
うに思えますが、実はそうではあり
ません。例えば、東京大の個別学力
試験の問題は、読解力と記述力だけ
でなく、現代社会に対する問題意識
を持つていないと解けません。文系
であれ理系であれ、自分なりの問題
意識を持つて批判的に読む力がない
と受験にも対応できない。これが国
語の難しさであり、魅力だと思
います。

変わらない国語観を 中高で共有する

読み取る力と批判的に読む力は、
明確に分けられるものではありません。
確かに、中学校と高校では扱う
素材の難易度は違います。中学生か
らすれば、『山月記』や『羅生門』
は難しい作品かもしれません。しか
し、中学生であっても繰り返し読ん
でいくうちに、なんとなく伝わって
くる、心動かされるということがあ
ります。「解けるか解けないか」が
明確な数学などとは異なり、国語に
おいて「読めるか読めないか」は実
ははっきり区別されるものではない

と思います。

中高の指導を充実したものにす
るためには、内容を正確に読み取る
力、問題意識を持つて批判的に読む
力の二つを押さえた授業が出来てい
るか、中高の教師が話し合うこと
で、連続した国語観が共有できるで
しょう。

正確な読み取りを求めた時、全員
が納得できる一つの答えが生まれま
す。しかし、現代人としての問題意
識を持つて批判的に読んだ時、答え
は人それぞれでしょう。国語の授業
に必要な二つの場面の矛盾を埋める
のが、教師の存在だと私は思うので
す。教師が「その文から何を感
じたか」という結論をしっかりと提示
することは、現代文の授業に教師が立
会った証拠でもあります。

『羅生門』から私は芥川龍之介の
人間としての成長の限界を感じたと
します。この私の結論に納得しない
生徒もいるでしょう。それでもいい
のです。私の結論は生徒が考えるた
めのきっかけなのです。教師の結論
から生徒が更に考えを深めていく。
それは中学校と高校どちらの授業に
も必要だと思っています。